伝統色名データベースにおける根拠資料と代表HEX値の追跡可能性

茜色・紅色・紺色の史料事例と39色の登録情報調査

北澤篤史

ORCID: 0009-0008-0387-5191

2026年11月4日

要旨

伝統色名データベースでは、歴史資料の語形、色材、所蔵品名、規格色とWeb代表色値が同じ色名の下に記録される。本研究は根拠を五分類し、「茜色」「紅色」「紺色」の史料事例と、著者が運営する「いろ百科」で2026年11月3日に固定した39件について、主として代表HEX値と出典メタデータを記述的に検査した。色値専用URLは9件にあり、参照先のHEX値と9件すべて一致した。一方、内部QAがpassの28件中22件には色値専用URLがなかった。専用URL空欄30件のうち、代替出典メタがあったのは22件、未設定は8件だった。大学公開の色名対応表と比較できた28件では24件一致し、4件相違した。出典の記載、値の一致、歴史的語形の確認は別の検査単位である。調査は単一サイトの非確率標本に限られ、古色の測色や史料全件の校合、第三者による再現性検証は行っていない。

キーワード：伝統色名、典拠管理、データ来歴、代表HEX値、歴史資料、デジタル人文学

English title: Traceability of source evidence and representative HEX values in a Japanese traditional colour-name database: Three historical examples and an audit of 39 records

Abstract

Traditional colour-name databases may place historical textual attestations, materials, museum catalogue names, standardised colours and web-display RGB/HEX values under one colour name, although these claims require different types of evidence. This exploratory case study distinguishes five categories of sources, discusses examples involving akane-iro, beni-iro and kon-iro, and audits metadata for 39 published records frozen on 3 November 2026 from Irohyakka, a website operated by the author. The quantitative audit concerns representative HEX values and related metadata, rather than all five categories for every record. Nine records had a dedicated source URL, and all nine displayed matching HEX strings at the referenced URLs. Among the 30 records without such a URL, 22 had alternative structured source metadata and eight did not. Of 28 records marked as passing internal quality checks, 22 lacked a dedicated HEX-source URL. Comparison with a separately published university colour-name table yielded 24 matches and four differences among 28 comparable entries. These findings describe recorded metadata and hexadecimal strings, not colourimetric equivalence, historical authenticity or the provenance of the selection itself. The non-random sample comes from a single author-operated site; exhaustive collation of historical source manuscripts and independent third-party replication were not conducted.

Keywords: Japanese traditional colour names; authority control; data provenance; representative HEX values; historical documents; digital humanities.

1. 研究課題

色名の解説で「古い用例がある」「染料が使われた」「博物館がその名で所蔵品を登録している」「JISに色名がある」「Webでは特定のHEXが使われる」という五つの説明は、同じ語を含んでいても、成立を判断するための資料・操作・対象が異なる。これらを単一の「出典」欄または単一の品質点数に統合すると、利用者がどの主張をどの証拠から追えるかを見失うおそれがある。

本研究の問いは、**（1）根拠資料を主張の種類別に記録することで、未確認事項を明示できるか、（2）Web代表HEXの一致と、その採用経路の追跡可能性を分けて評価すると、どのような未整備・相違が検出されるか**、の二点に限定する。新たな歴史的初出や古代色の唯一のRGBを認定することは目的としない。

研究対象の宣言：本研究は特定の色名データベースを対象とした探索的・記述的な事例研究である。検出された件数を母集団一般へ外挿せず、用語の歴史的意味、画面用の参考数値、規格に定められる色名・色票の区別を維持する。

2. 先行研究との関係

國本学史（2019）は日本色彩学会第50回全国大会の発表論文集で、日本の色名の近代化を色材・教育・国語国字問題と関連づけて論じた。さらに國本（2022）は『日本の芸術に関わる色名と色材の異同』で、胡粉の材料変化や紺青・群青の名称と色材の対応が時代により変わる具体例を、資料・試料を使って検討した。したがって「色名と色材は同じとは限らない」という一般論は本稿の独創的発見ではない。W3CのPROV-O（2013）はデータ、活動、主体の来歴を記述する一般的な枠組みであり、Wilkinson et al.（2016）のFAIR原則はデータとメタデータの再利用可能性を扱う。これらの研究・標準は本稿の分類が独自の理論として既に確立したことを証明するものではない。本稿の検討対象は、色名の歴史的類型を新たに発明することではなく、**特定サイトの実データに対して主張単位・確認段階・数値採用経路を分離した時に検出できた事象**である。

文化遺産メタデータの来歴表現については、Massari et al.（2026）がRDFによる変更履歴・出典の追跡方法を包括的に比較し、PROV-O、Named Graphs、OpenCitations Data Modelなど既存手法の機能と課題を整理している。そこでは複数の相反する記述や変更履歴を、断定と区別して表現する重要性も論じられている。したがって、本稿での「資料の種類・版・確認手順を分けて記録すべき」という原則は、既存の来歴研究によって既に議論されており、それ自体を新理論とは主張できない。本稿の寄与は、**日本の伝統色名を説明する実際のWebデータベースに、この問題を適用したときに検出される出典欄の欠損・数値の不一致・資料名の誤同定などを、再現可能な記録単位で示すこと**に限定する。著者による分類の第三者判定・既存モデルへの完全な形式実装は行っていない。

本事例の独自性をさらに評価するには、既存の色名データベースの来歴管理や資料記述スキーマとの比較を通じて、既存手法で可能な処理と本事例で明らかになった問題を区別する必要がある。

さらに文化遺産情報を統合する既存の概念モデルとして、CIDOC CRM 7.1.3（2024年2月の公式版）もある。このモデルは異種の文化遺産情報の共有・統合を目的とし、来歴や知識ベース内の記載主体を記述する実践も含む。PROV-Oも資料・処理・記録主体の関係を表現できる。したがって本稿のN/M/O/S/W五分類は**新しいオントロジーや史料批判理論の発明**とは主張しない。上記モデルと競合するものではなく、個別色名の記事における「何についての主張を、どの資料で、どの段階まで確認したか」という編集上の判定項目として位置づける。PROV-O・CIDOC CRMの形式モデルへの完全なマッピングや独立評価は未実施である。

3. 資料・方法

3.1 対象と調査時点

歴史的な根拠の分類事例として「茜色」「紅色」「紺色」を目的抽出した。茜色は辞典引例と他出する歌の本文に語形差があり、紅色は古典文学の校訂本文の用語、紺色は古文書の物品の色指定として対比できるためである。統計的代表性を持つ無作為抽出ではない。

登録情報の分析には、2026年11月3日の時点で「いろ百科」WordPress投稿タイプiro_colorの公開状態にあった39件を固定標本として使用する。以降の新規公開分は追加しない。投稿ID、調査日時、採用HEX、出典に関するメタ項目、および本文の参考文献の所在を非公開研究台帳に記録する。**この39件は現在のサイト全公開件数を意味しない**。

3.1.1 著者と調査対象の関係・選択バイアス

「いろ百科」は本稿著者自身が運営するWebサイトであり、今回の登録情報・内部品質判定・出典メタデータは研究者が運営に関与するシステムに由来する。したがって、本研究の調査は第三者機関による監査ではなく、**運営者による自己データの探索的な記述分析**である。この関係を明示し、内部QAのpassを独立した学術的な正確性検証の合格と扱わない。

39件は調査時点の公開レコードを抽出し、2026年11月3日に版別メタデータとして固定したものであり、一般の伝統色名からの確率標本ではない。対象サイトの編集方針・公開規則・記録形式に依存する可能性がある。外部の別サイトへ同じ割合を一般化することや、特定の審査方式が出典の充足度を改善したという因果関係は主張しない。第三者による符号化と外部コーパスでの追試は未完了であり、本研究の限界として明示する。

3.2　根拠の五分類

表1　色名についての主張と根拠資料の五分類

記号	資料の役割	その資料だけでは主張できないこと
N：原文用例	特定の写本・刊本・校訂本文における語形と文脈	単なる同字形から初出・同一語義・同じ色を確定すること
M：色材・技法	植物・染料・顔料・技法の歴史を示す資料	色材の使用を複合色名の原文出現と同一視すること
O：所蔵品目録	博物館等が付した所蔵品名・材質・年代	現在の目録名が制作当時の呼称だったと推定すること
S：規格	色名体系・規格番号・版・色票・色記号	規格色名から古代物体色や公式HEXを自動的に導くこと
W：Web代表値	採用RGB/HEX・出典・値の選定または変換手続	参考値を歴史染織物の実測値だと扱うこと

五分類の操作化と今回の実施範囲：N/M/O/S/Wは資料の役割を識別するための編集上の分類案であり、研究中の色名レコードすべてについて、五分類の全項目を二人の判定者が独立に付与したデータセットではない。本稿で実際に確認したのは、歴史資料に関する目的抽出3色の事例比較、39色の**W（Web代表色値）に関するメタデータ**、登録された専用URL・内部品質判定、および大学公開表とのHEX照合である。色材M・所蔵品O・規格Sの実証分析を39色すべてに広げたとは主張しない。この範囲の違いを明示することで「五分類を提案したこと」と「全レコードに五分類を実装・評価したこと」を区別する。

3.3　史料の確認段階

原画像・実物の特定箇所を目視し、頁・丁・行が特定できた場合を「原画像逐字確認」、研究機関の翻刻・校訂本文のみの場合を「機関校訂・転記」、辞典の引用だけの場合を「辞典引例」、所在だけ分かる場合を「書誌確認」と記録する。写本の書写年代、元となる作品の成立年代、後代の校訂年代は別に記録する。いずれも根拠の種類と検証済みの範囲を示すラベルであり、原資料の真贋や成立年代の保証ではない。

3.4　登録情報とHEX値の照合

固定39件について、iro_hex_primary、iro_value_basis、iro_value_source_name、iro_value_source_note、iro_value_source_url、iro_source_master_id、iro_content_sources_json、iro_quality_statusと各本文の参考文献一覧を区別して点検する。個別HEXについて参照元との比較が可能な場合は、先頭の「#」およびアルファベットの大小だけを正規化し、6桁の16進値が一致するか調べる。色差や測色の同等性をこの文字列一致から導かない。

さらに、西村まどか（2012年度講義資料）が公開する「JIS慣用色名」対応表と、39件の色名表記および参考HEXを突き合わせる。同じ語形の色名と比較可能な16進値が確認された場合のみ一致・不一致を判定し、対応が見つからない場合は別区分とする。この大学講義用表は日本規格協会の規格原本そのものではなく、参考のWeb数値対応表として扱う。

再現可能性に関する留保：39件の採用HEXと出典メタ値は、調査時点に固定した版別データを再取得して集計した。ただし39記事の本文全文そのものを同じ時点の不変スナップショットとして保存したわけではない。追加の読み取り時点のWordPress本文をSQLで点検すると、39件すべてに「参考文献」の文字列とリンク構文が存在したが、これは同一版時点における引用先の真正性や、各HEXの採用理由の復元を直接証明するものではない。本文の版と検査日時を明示し、完全な版間再現性とは区別する。

3.5　保存データの同一性と引用節の構造検査

WordPressの調査時点の39件に対応する保存済み入力値と、外部参考色名表との比較結果を収めた保存済み入力値を区別し、それぞれの元のバイト列についてSHA-256ハッシュを記録した（非公開附表「補足検証7」）。このハッシュは**再集計時の入力ファイル相当データの同一性**を確認する指標であり、引用先の信頼性・記載の真正性や外部再現性を証明しない。

固定投稿ID39件の本文に関しては、調査後のWordPressデータを別途検索し、全39件に「参考文献」と記された見出しと、その後の外部または内部リンクを確認した。これは2026年11月4日時点の本文構造の確認であり、11月3日の全文スナップショットとの同一性を立証するものではない。個別HEXの出典資料と歴史的語形の証拠は、リンクの存在だけで妥当性が判定できないため、別の検査単位として残す。

4. 結果

4.1　三色の根拠は異なる資料階層に属する

表2　3色の歴史的資料とWeb代表HEX値の確認範囲

色名	本稿で扱った記載	確定できる範囲・留保	登録代表HEX
茜色	『精選版 日本国語大辞典』は『詠歌大概』の「あかね色哉」を引用。一方『新古今和歌集』第99番歌を伝える名古屋大学の古筆切には「あかぬ色かな」	古筆切の該当末句は原画像で「あかぬ」と確認したが、『詠歌大概』各伝本の該当文字は未校合。13世紀の「茜色」の初出は認定しない	#9E2236（参考値）

色名	本稿で扱った記載	確定できる範囲・留保	登録代表HEX
紅色	奈良県立万葉文化館『万葉百科』所収『万葉集』巻十九・4192番歌「桃花紅色尒」	奈良県立万葉文化館の凡例によれば西本願寺本を底本とする校訂・転記本文に基づく文学用例。底本の該当箇所の原画像は本研究では未照合であり、物体色の測色値は導けない	#BE003F（参考値）
紺色	東京文化財研究所が『徴古雑抄』経由の『大日本古文書』第2巻から示す747年付『法隆寺伽藍縁起并流記資材帳』の「衣具紺色」	伝世資料の記述と後代写本・目録を分ける。747年作成の原本を直接目視したものではない	#343D55（参考値）

奈良国立博物館（2022）の「茜」は植物性染料の資料であり、色材の歴史を示す一方、複合色名「茜色」の古用例そのものを示すものではない。また、辞典の『詠歌大概』引用と名古屋大学蔵『新古今和歌集切』gk53の語形差は、二つの別の資料上の転記・原画像を対照した結果であって、『詠歌大概』原写本の異文を直接確認したものではない。

この法隆寺史料の書名は、東京文化財研究所の公開データでは「資材帳」と表記される一方、国立公文書館の所蔵書誌では「資財帳」と表記される。ここでは引用箇所の所在を示す目的で東京文化財研究所の表記に従い、書名表記の差異だけから別の史料・異なる本文系統が存在すると推定しない。

三色の代表HEXはサイトが採用した参考値であり、古代の実測値でも規格が直接指定した唯一のHEX値でもない。事例の語形・色材・規格・Web値を同じ根拠で説明できないことを確認した。

4.2　固定39件の出典メタデータ

表3　固定39レコードの出典・色値メタデータの登録状況

点検項目	39件の記録結果	解釈
代表HEXの区分	site_representative 35件／approximate 4件	採用方式の分類であり、歴史的真偽の判定ではない
色値専用の出典URL	登録あり9件／空欄30件	URL欄の空欄と証拠の不存在は同義でない
出典名と出典注記	双方とも39件で登録	記載の存在のみで個別値の再現性を証明できない
出典マスターID	有効ID27件／未設定12件（「0」4件・空欄8件）	個別HEXの出典とは限らない
参考資料JSON	非空12件	語義・歴史資料とHEXの算出根拠を区別する
サイト内部品質判定	pass 28件／pending 11件	査読・原典校合の合格を意味しない

専用URLがない30件のうち22件には有効な出典マスターIDまたは別の参考資料メタがあり、残る8件は両欄とも未設定だった（出典マスターID「0」を含む）。一方、保存済み投稿IDの現存本文39件を確認すると、39件すべてに参考文献の見出しと、その後に続くリンクがあった。これは調査後の本文構造に関する結果であり、2026年11月3日時点の本文全文が同じであること、また個別HEXの採用・換算元が当該リンクから一意に追跡できることを意味しない。

4.2.1　内部品質判定と色値出典メタの三段階

固定39件の同じ保存データを用い、内部品質メタiro_quality_statusと色値出典情報の入力状況を交差集計した（表4・図1）。個別値専用のiro_value_source_urlがある場合を第1群、専用URLは空欄だが正の整数である出典マスターIDまたは非空の参考資料メタのいずれかがある場合を第2群、専用URL・両代替メタとも未設定の場合を第3群とした。出典マスターIDが文字列「0」の場合は有効な参照先を指さないため未設定とみなし、元の値は変更せず分類時のみ正規化した。ここでの内部品質判定はサイト内の評価項目であり、責任者による公開承認ih_editorial_approvalや学術的査読とは異なる。

表4　個別HEX出典情報の三段階と内部QA判定の交差集計（件）

出典メタ情報の状態	pass	pending	計
専用出典URLあり	6	3	9
専用URL空欄・代替メタあり	22	0	22
専用URL空欄・代替メタなし	0	8	8
計	28	11	39

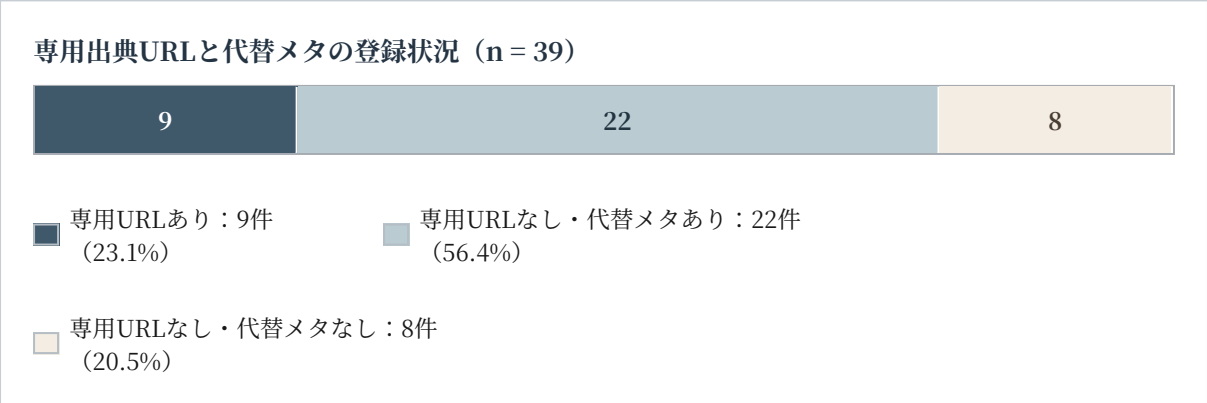


図1　固定39件における個別HEX出典メタ情報の三区分（著者作図）。出典マスターIDが「0」の場合は未設定に分類した。これは登録欄の状態の分布であり、本文の参考文献の有無や各色値の学術的妥当性を示すものではない。

専用URLの空欄は計30件だが、うち22件には有効な代替メタがあり、8件には対象となる三つのメタ欄のいずれにも有効な値がなかった（出典マスターID「0」は未設定扱い）。後者の8件は全て内部QAがpendingだった。一方、passの28件中22件には専用URLがない。この分類は**構造化された入力欄の記載状況**の検査に限定される。各記事本文に参考文献の見出しとリンクが存

在するため、第3群を「参考文献なし」と呼ばない。また、内部QAの評価基準・サイト内の公開処理がこの分布に影響した可能性はあるが、少数の自己サイト内レコードに基づく記述統計から、内部QAと出典情報の因果関係を推定しない。

4.3　外部参考値との照合と出典同定の精度

固定標本における数値と出典の関係を追加検証するため、2026年11月3日に固定した39色の出典メタデータを再取得し、出典URLが登録された9件の参照ページの表示値を改めて対照した。内訳はW3C CSS色名2件（silver、gold）、colordic.orgのWeb色見本6件、大学の公開色名表1件であり、いずれも採用値と出典ページの16進表記が一致した（9/9件）。ただしW3Cのsilver・goldはCSSの色名であって、銀色・黄金色の歴史的な実測色を裏付けるものではない。参照ページの値と一致しても、規格や史料による正当化が自動的に成立するものではない。

表5　個別出典URLがある9件の登録HEX照合結果

投稿ID・色名	登録HEX	実際の参照先	照合
80 青緑	#008E94	大学公開の慣用色名対応表 No.89	一致
134 銀色	#C0C0C0	W3C CSS Color 4、silver	一致
135 黄金色	#FFD700	W3C CSS Color 4、gold	一致
1110 砥粉色	#F4DDA5	colordic.org 和色大辞典	一致
1228 緑青色	#47885E	colordic.org **原色大辞典**	一致。ただし元の出典欄では「和色大辞典」と誤表記
1311 紺青	#192F60	colordic.org 和色大辞典	一致
5234 花緑青	#00A381	colordic.org 和色大辞典	一致
5341 利休色	#8F8667	colordic.org 和色大辞典	一致
5419 白茶	#DDBB99	colordic.org 和色大辞典	一致

緑青色（投稿ID1228）については、登録HEXと個別参照URLの表示値は合致したが、当初の出典メタには「和色大辞典」と記され、実際のリンク先の表題は「原色大辞典」であった。これは**数値照合の一致と資料同定の一致が別の検査項目**であることを示す一例である。修正前の登録名は研究標本に保存し、調査後のWordPress編集は遡及的に固定データへ反映しない。

続いて、同じ固定39件を大学公開の慣用色名数値表と照合した。歌詞・語源などの語義の近似ではなく、漢字表記および括弧内の読みを正規化した同一見出しのみを採用し、比較可能な28件中24件はHEXが一致、4件は相違した（表6・図2）。残る11件は同一見出しの比較可能なRGB値を確認できなかったため分母から除外した。例えば外部表の「金色」はサイトの「黄金色」と同一見出しとみなさず、「銀色」は外部表に記載があってもRGB欄が「表示不可」のため比較不能とした。

表6　大学公開の色名対応表との比較で相違した4色

色名	サイトHEX	外部表HEX	RGB差（サイト−外部表）
浅葱色	#00A3AF	#00859B	(0, +30, +20)
緑青色	#47885E	#4D8169	(−6, +7, −11)
紺青	#192F60	#3A4861	(−33, −25, −1)
鶸色	#D7CF3A	#C2BD3D	(+21, +18, −3)

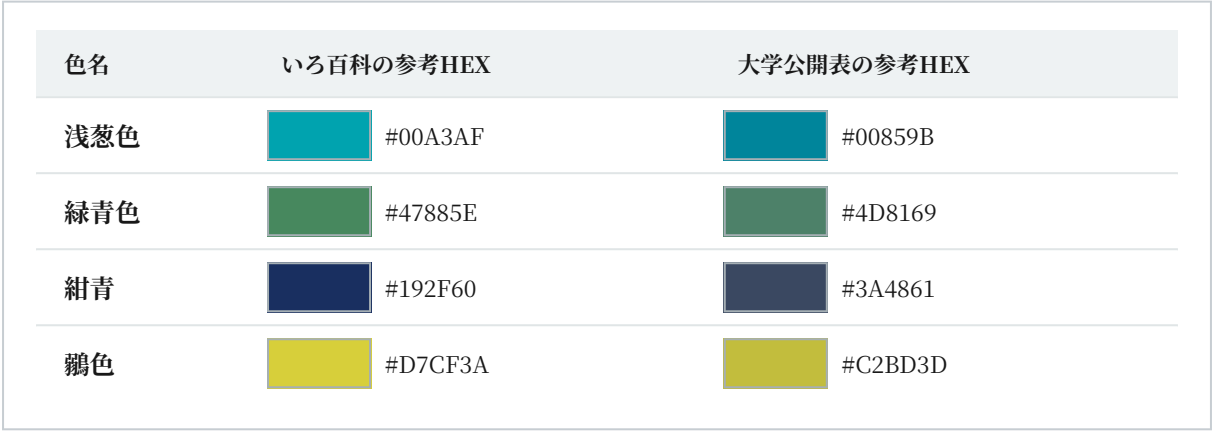


図2　同一見出しの参考HEX値が相違した4色の画面表示例（著者作図）。参照元：西村まどか（2012年度講義資料）の公開表、および本研究の固定39件。色片は記載されたHEX値に基づくディスプレー用の参考表示であり、色票・歴史的染織物・顔料の測色結果や知覚色差の比較を意味しない。

この比較をもとに分けるべき状態は、(a)専用URLの記録有無、(b)記載された参考資料の存在、(c)出典ページとの値一致、(d)出典の名称・種類の正確さ、(e)同名の別の数値があるか、である。9件の値一致は当該9件の比較結果であり、固定39件全体の出典信頼性の得点には変換しない。例えば大学講義用対応表のNo.81は「緑青(りょくしょう)色」と記すが、日本規格協会発行のJIS Z 8102:2001正誤票（2002年9月、1頁・原規格21頁／付表1）はその読みを「りょくしょういろ」から「ろくしょういろ」へ訂正している。したがって、同表の表示HEXを文字列比較の対象にできても、読みや規格本文の正本として用いることはできない。

4.4　各検査が回答できる問いの分離

表7　検査単位と実証範囲の対応および限界

検査単位	必要な記録	今回の結果からいえること	結果だけではいえないこと
内部QA	品質判定の版・判定時刻・基準	固定39件ではpass28・pending11	原文・出典・測色が学術的に検証済みであること
出典URL	個別の掲載元URLと確認日時	出典URLあり9・空欄30	空欄30件に一切の参考文献がないこと
HEX文字列照合	登録値と参照元に示された値・正規化規則	専用URLの9件は9件一致	元データの採用理由・歴史的真偽・測色の妥当性

検査単位	必要な記録	今回の結果からいえること	結果だけではいえないこと
資料名の同定	シリーズ名・ページ名・個別URL	一致した9件中1件で記録名とリンク先のシリーズ名に差異	シリーズ名が一致していれば数値や学術的根拠も正しいこと
同一見出しの別数値	色名・比較条件・双方のHEX	比較可能28件中4件の参考値に相違	同一物体色を実際に測定した色差であること

再現可能性を担保する最小の主張記録として、色名ID、主張の種類（N/M/O/S/W）、出典の同定情報（著者・資料名・版・頁またはURL）、検証対象の値・字形、確認水準、確認日時、値の正規化・換算手続、判定・未判定理由をそれぞれ保存するのが望ましい。本稿では既存のWordPressメタと版別台帳に分散した値から部分的に復元しており、全ての主張について一つの完全な記録を実装できたわけではない。独立した第三者に同一記録を渡した場合の判定再現性は、今後の検証課題である。

5. 考察

本調査の観察結果には少なくとも三つの区別が必要である。第一に「色名について何らかの参考文献があること」と「特定HEXの採用根拠が明示されていること」は異なる。専用URLが空欄の30件にも文献一覧が存在した事実と、内部QAがpassでも22件に専用URLが無いという交差集計結果は、資料の欠落や根拠追跡可能性を単一欄・単一の内部合格点から判定する設計の限界を示す。ただし、本文参考文献そのものは調査時点のWordPressの現存本文で再確認したのであって、固定日時の全文版を保存して立証したわけではない。第二に「出典URLの値と登録HEXが一致すること」と「その値が規格色や歴史的な物体色を忠実に再現していること」は異なる。第三に「同じ色名に一致または不一致のHEXがあること」は、規格本文や実測の色差を検証したことを意味しない。

N/M/O/S/W分類は、この三つの誤認を生じさせないために、**一つの色名レコードから複数の主張と出典を区別して追跡する記述方法**として用いる。ただし、この五分類が既存の学術的来歴記述モデルより優れていることを本稿が示したわけではない。PROV-OやFAIR原則との対応をさらに検討し、独立した判定者が同じ結果を再現できるか、今後の検証で確認する必要がある。

6. 結論・限界

伝統色名の史料事例と単一のWebデータベースの固定39件を調べた結果、情報の種類を五分類すると、歴史的語形の確認、参考HEXの数値一致、採用根拠の存在を異なる検査単位として記録できた。実データでは、専用URLが登録された9件と代替の構造化出典メタがある22件、いずれの出典メタも未設定の8件を区別できた。他方、調査後の現存本文39件には参考文献の見出しとリンクがあり、構造化メタの有無から文献そのものの欠落を推定できない。また、専用URL9件の参照値との文字列一致と、外部対応表の比較可能28件における24件一致・4件不一致は、別の検査結果だった。また、緑青色1件では数値が一致しても出典のシリーズ名が正しく登

録されておらず、記述の追跡可能性は数値一致だけでは確保できないことが具体的に認められた。これらを一つの品質点数や唯一の「正解HEX」に還元すべきではない。

本調査は目的抽出した3色と著者自身の運営する単一サイトの39件に限られ、色名体系全体の代表性や独立した外部監査としての妥当性を主張しない。五分類の全項目を39件に対して独立に符号化して検証したわけではなく、実証的な再集計の中心はWeb代表HEX値とその出典メタデータに限られる。本稿の結論を「茜色」の初出確定、『詠歌大概』の校異の解決、JIS原本が指定する色値の確定、古色の物理的測定へ拡張しない。固定39件の再現用データの提示、独立した再点検、先行研究との比較、引用ページと規格原本の残余確認を完了するまでは、学術的に最終確定した論文とは扱わない。

書誌注記：本稿は著者公開の研究原稿であり、学術誌の査読は受けていない。調査対象のWebサイトは著者本人が運営する。公開日：2026年11月4日。

参考文献

國本学史（2019）「日本の色名の近代化」『日本色彩学会誌』43巻3+号（日本色彩学会第50回全国大会［東京］'19発表論文集）、43–46頁。DOI：10.15048/jcsaj.43.3__43。

Massari, A., Peroni, S., Tomasi, F., & Heibi, I. (2026). “Representing provenance and track changes of cultural heritage metadata in RDF: a survey of existing approaches.” Digital Scholarship in the Humanities, 41(Supplement 1), i196–i212. First published online 30 July 2025. DOI: 10.1093/llc/fqaf076.

國本学史（2022）「日本の芸術に関わる色名と色材の異同」『色彩学』1巻4号、226–229頁。https://color-science.jp/wp-content/uploads/2022/11/b1-4-226-229-bulletin.pdf。

Wilkinson, M. D., et al. (2016). “The FAIR Guiding Principles for scientific data management and stewardship.” Scientific Data, 3, 160018. DOI: 10.1038/sdata.2016.18.

W3C (2013). PROV-O: The PROV Ontology. W3C Recommendation, 30 April 2013. https://www.w3.org/TR/prov-o/.

W3C (2026). CSS Color Module Level 4. W3C Candidate Recommendation Draft, 6 August 2026. https://www.w3.org/TR/2026/CRD-css-color-4-20260806/.

日本規格協会（2001）『JIS Z 8102:2001 物体色の色名』。日本規格協会・規格書誌。

日本規格協会（2002）『JIS Z 8102:2001 物体色の色名 正誤票』（2002年9月、2頁）。公式正誤票PDF。

西村まどか（2012年度資料）「情報交換概論　第3回（電子文書の種類）『JIS慣用色名』」講義用公開色名対応表。https://www.koeki-prj.org/~madoka/2012/dtd/03/dtd_03_10_appendix_05_jiscolor.html。

小学館『精選版　　日本国語大辞典』「茜色」項。コトバンク掲載版。https://kotobank.jp/word/%E8%8C%9C%E8%89%B2-192621。

名古屋大学附属図書館所蔵『新古今和歌集切』（後藤文庫gk53、資料番号11738943）。名古屋大学デジタルアーカイブ。

CIDOC CRM Special Interest Group (2024). Definition of the CIDOC Conceptual Reference Model. Version 7.1.3, February 2024. https://cidoc-crm.org/Version/version-7.1.3.

奈良県立万葉文化館『万葉百科』「『万葉集』巻十九・4192番歌」。歌番号4192。凡例（西本願寺本を底本とする旨）。

東京文化財研究所「紺」日本美術の色彩資料。『大日本古文書』第2巻、606–607頁から『法隆寺伽藍縁起并流記資材帳』として引用。東京文化財研究所公開資料。

国立公文書館デジタルアーカイブ『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』（内閣文庫所蔵、請求番号192-0130）所蔵書誌。https://www.digital.archives.go.jp/file/1226863.html。

奈良国立博物館（2022）「茜」『第74回正倉院展　　用語解説』。https://shosointen-glossary.narahaku.go.jp/akane/。